

〈中学部夏期研修〉

執筆：宗田 和美（北河内地区）

テーマ

「井上直久さん」講演会・ワークショップ



はじめに

令和元年より、中学部では「本物に触れる」や「自分たちの実践を振り返る」ことを基本テーマとした研修を夏と冬に開催している。

今年は、大阪府在住の画家でアーティストでもある井上直久さんに、講演会とワークショップを通して本物のアーティストの貴重な話をさせていただき、参加者と交流ができる場を設けた。

井上さんは、教鞭をとられていた経験もあり、「教師としてどう生徒に指導するか」、「実技的な指導はどのようなことを留意しておくのか」など、参加者にとって、2学期以降の図画工作・美術の授業のヒントになるものであった。

【講師：井上直久さんについて】

1948年東大阪市生まれ。茨木市在住。大学卒業後、2年間広告代理店勤務。その後20年間大阪府立春日丘高等学校で勤務された。学校勤務と並行して、異郷「イバラード」をテーマとした作品を発表された。1995年公開のスタジオジブリ製作『耳をすませば』中の挿話「バロンのくれた物語」の背景画を制作された。2002年から6年間成安造形大学に教授として勤務された。



研修の様子

令和7年7月29日（火）茨木市文化・子育て複合施設「おにクル」の会議室で、午後1時30分より行われた。

三島地区を中心に、北は豊能、南は泉南と、大阪府全体から小中学校の50名を超える参加者が集まった。参加者は、それぞれ井上さんの昔からのファンの方、ジブリの作品で興味を持った方、成安造形大学時代の教え子だった方などさまざまで、研修会の始まりはとてもあたたかい雰囲気の中スタートした。



西井加奈子先生（泉北地区）の司会で、内本年昭先生（府美研会長）と中島嵩先生（中学部部長）のあいさつの後、井上さんの講演会が行われた。

①講演会

井上さんがこれまでの人生でどのような人と出会い、影響を受けたのかなどお話いただいた。

「幼少期には、新聞に連載されていた『少年ケニア』を父親が読んでくれて、登場人物の姿や世界観を想像するのが好きな子どもであった。小学校3、4年生時の担任の先生（具体美術協会所属）の図画工作の授業が非常に面白く、そこで美術が大好きになった。先生が連れていってくれた美術館で白髪一雄氏の作品を鑑賞し、その制作方法や抽象画の作品に衝撃を受けた。金沢美術工芸大学ではバウハウスを学んだ。就職した広告代理店では、丁寧な仕事が評価され、仕事を依頼されることが増えていった。高校の恩師の後任として母校で教鞭をとることになり、そこでもクロッキーを大切にしていた。井上さんの祖父は井上木它（もくだ）氏。祖父が画家であったことが美術に対する興味にも大きく影響している。」

他にも、様々なエピソードをうかがうことができた。



②ワークショップ（クロッキー）

ワークショップでは、参加者全員で円状に広がり、クロッキーに取り組んだ。5分間のクロッキーが終わると井上さんの講評が行われ、次のモデルが決まるとクロッキーが始まるという流れを5回以上行った。クロッキーをしている間、参加者も井上さんも誰一人声を発さず、鉛筆が紙とこすれる音だけが会場を包み、全員が集中して取り組んでいた。クロッキーに没頭している間は、井上さんの生徒になったような、学生に戻ったような感覚であった。講評の中で井上さんがおっしゃっていたのは、「クロッキーは絶対にこう描かないといけないという決まりはない。そこに人が存在しているというように描くのが大切。」つまり、クロッキーで描かれる線が滑らかな1本線でも、短いストロークであろうが、影だけでも、くるくる渦のように自由に描いてもいいとのことだった。生徒の才能や良いところを伸ばす井上さんの言葉が会場を温かくしていたのが印象的だった。余談ではあるが、モデルはその場の空気を読んで自主的に出てこられた参加者がしてくださっていたが、途中から井上さんがクロッキーに加わってくださり、できたクロッキーをモデルがもらえるというサプライズがあると、次々にモデル希望者が増えたのが面白かった。



質疑応答

最初の講演会では聞けなかったことを井上さんに質問し、それにお答えいただいた。「画材は何を使っているか。」「なぜその画材を使っているのか。」「ジブリの映画に井上さんの絵が使われるようになったきっかけは?」「『イバラード』はどこから発想しているのか?」「作品の制作の手順は?」などの質問が出た。井上さんが丁寧に答えてくださった。

参加者のふりかえりより

講演会について

- ・作家であり、元高校教諭であり、さらに大阪府出身の井上先生のお話を直接お聞きできて学びが深かった。
- ・画家・アーティストとして評価され、活動を続けている「本物」の先生に実際に会って話を聞いた。参加者からの質問などを通して先生の人柄やこれまでをより深く知ることができた。「自分で考えて咀嚼して味わう」必要はあったが、わかりやすく与えられるものだけでなく、自分で価値を見出すことの必要性も改めて感じた。
- ・井上直久さんから数々の貴重なお話、エピソードが聴けましたのでとても満足しています。中でも祖父が画家であり、デザイナーだった話は井上さんの才能のルーツが解り、宮崎駿さんとの出会いも必然だったように感じました。また、作品を間近に見れる貴重な機会を頂きうれしかったです。あまりの美しさに感動したのと、何気に貴重な作品を置いてあったのでびっくりしました。もったいぶらずにすごかったです。



ワークショップについて

- ・「正解」を想定していると、それから外れた際に「失敗した」「できなかった」という否定的な感情に支配されてしまうが、線が少なくても、線が多くても、図が大きくても小さくても、描き手が感じて表現したことそのものの「よさ」を捉えること、受け入れ、味わい、認めることの大切さを再認識した。「優劣」「上手下手」ではない、それぞれの「よさ」を認められるものを学校での学習活動では大切にしたいのだということが伝わった。
- ・井上さんの指導の元、参加者全員がクロッキーする素敵な時間でした。井上さんの古くからのファンと思われる男性も、自分を描いてもらえるのは、感動の極みだったでしょう。また、井上さんのチャームな一面も見られて楽しかったです。
- ・授業や美術部でよく取り組んでいるクロッキーに新たな視点を教えてもらえた。



本研修全体を通して

- ・活発に質問・疑問・感想が出ていてよかった。司会の先生の動きがよかった。
- ・アクリル絵の具を日本でいち早く取り入れ、自身のオリジナルな表現にまで使いこなせている方から、当時の絵具メーカーと二人三脚で作上げた経緯を聞かせてもらえた。
- ・教員になってから今までの講演会、及び、ワークショップで一番良かったです。私をモデルに描いて下さったことは生涯の思い出とさせていただきます。

今後に向けて

教師自身も日ごろの職務に忙殺されながら抑えていた芸術家の面を刺激された。また、井上さんの才能を伸ばした先達のように、美術を好きになる児童・生徒を増やせるような教師になりたいという初心にかえることができた研修会であった。これからも、いろいろなニーズにこたえられるような研修を企画し、大阪府全体の美術の教育活動を盛り上げていきたい。